

- 1600年 蘭リフリーデ号豊後に漂着
ウイリアム・アダムズ(三浦按針)
蘭・東インド会社設立



- 1609年 平戸で商館設置 41年出島に移転
- 1639年 ボルトガル船の来航禁止



鎖国政策

- 人的交渉・交流の制限、極端な貿易制限
 - 幕府による海外貿易と海外情報の独占
- 4つのルート
 - 松前口、対馬口、長崎口、薩摩
- 情報：和蘭風説書 商館庁による江戸参府

水野越前守忠邦 (1794-1851)



- 天保の改革(江戸を開府当時に戻す)
- 唐津藩主。唐津藩が長崎警備役で昇格に障害が生じると知るや、自ら願い出て25.3万石の唐津から15.3万石の浜松に転封。その後、第11代將軍徳川家斉のもとで頭角を現し、大坂城代、京都所司代、西丸老中、本丸老中、老中首座(1839年)(青雲の要路)
- 内憂外患、異国船が日本近海に出没して日本の海防を脅かす一方、年貢収入が激減するなか、放漫な財政に強い危機感を抱く。家斉在世中はダメだったが、家斉死去(1837)を経て、遠山景元、矢部定謙、鳥居耀蔵を登用して天保の改革に着手した。(アヘン戦争=1842)
- 土風振興 封建秩序回復 年貢増収 物価抑制 將軍權威回復 海防充実 手始めに大御所家斉が愛妾お美代の方の為に建てた感応寺の伽藍を解体(腐敗墮落の象徴)
- 農村復興のため人返し令、奢侈禁止・風俗肅正、株仲間解散。夏の花火、縁台将棋、句もの売買、銭湯の混浴、芝居は移転、浮世絵、相撲、人情本、釣り等禁止 おふれが179本
- 1843年に印旛沼開削、上知令を断行しようとして失敗。同年失脚。
- 1851年に死去、享年57。

水野落首

- 白川の昔の浪にひきかえて、浜松風の音の激しき。
- 江戸中のほしがるものを矢部にして、鳥居どころか、なんの甲斐なき
- 髪結いは停止になりて髪乱れ
- 徳川の清き流れを堰き止めて、己が田へ引く水のにくさよ
- 水のきれて印旛は沼の淵となり、十里四方は元のもくあみ

3

鳥居甲斐守耀蔵 (1796-1873)



- 実父は大学頭を務めた林銜タ行で耀蔵は三男。
- 水野忠邦の天保の改革の下、目付や南町奉行として市中の取締りを行う。渋川六蔵、後藤三右衛門と共に「水野の三羽鳥」と呼ばれる。蛮社の獄で渡辺華山ら洋学者を弾圧、また、南町奉行矢部定謙を讒言により失脚させ、その後任として南町奉行となる。
- おとり捜査等陰険極まりない取締、人々から『妖怪(耀-甲斐)』の渾名で嫌われる。
- 北町奉行だった遠山景元(金四郎)が、水野・鳥居の政策に批判的な態度をとり、規制緩和を図ると、鳥居は水野と協力して、遠山を北町奉行から、閑職の大目付に転任させた(遠山は鳥居の失脚後に南町奉行復帰)。

4

鳥居甲斐守耀蔵

- 天保の改革末期に水野が上知令の発布を計画し、これが諸大名、旗本の猛反発を買った際に、鳥居は反対派の老中土井利位に寝返り、水野時代の機密資料を残らず土井に横流した。水野は老中辞任に追い込まれ、天保の改革は頓挫してしまう。鳥居は水野を裏切って、地位を保つことに成功したが、半年後、水野は再び老中復帰。鳥居は不正を理由に解任され、丸亀藩に預けられる。座敷牢に20数年閉じこめられるが、その間一貫して傲慢不遜。あきれられる以上に尊敬されるようになったといわれる。

- 小善は大悪に似て、大善は非情に似たり
- 大塩平八郎(乱1837)を弾劾
- 南町奉行矢部駿河守定謙を失脚させる
 - (大版西町奉行時代に大塩を評価した)
- 江戸湾測量で江川太郎左衛門を妨害
- 蛮社の獄(尚歯会渡辺華山・高野長英)
- 高島秋帆を失脚させる



文京区吉祥寺

江川太郎左衛門(1801~55)

- 江戸後期の葦山代官。号は坦庵、太郎左衛門を世襲、諱は英龍。
- 1835年(天保6)代官を襲職、改革派幕吏として水野忠邦の天保の改革に参画。綱紀肅正、一貫して西洋軍制による兵制の改革を献言した。
- 1838年渡辺華山に近いこともあって目付鳥居耀蔵と対立、蛮社の獄を惹起する一因。1842年高島流砲術が公認されるや、門人1号となり、葦山に塾を開き人材を養成した。
- 忠邦の失脚、ペリー来航もあって幕政に復帰し、下田開港・反射炉の建設・君沢船の建造等先駆の事業にあたるが、中途にして病没。



江川太郎左衛門の自筆

高島 秋帆 (1798-1866)

- 長崎の町年寄兼鉄砲方の家に生まれた。
- 1814年父の跡を継ぐ。父から荻野流、天山流砲術を学んだが、洋式砲術と差があることを知り、蘭語兵書など欧州軍事技術を修得した。
- また私財を投じて各種の火器を買い天保5年(1834)には高島流砲術、洋式銃陣を教授するようになった(門弟300人とも)。
- アヘン戦争(1839)に関する情報に衝撃を受け、西欧のアジア侵略から日本を防御するために洋式砲術を採用すべきだとする意見書を江戸幕府に提出した。
- 1841年、幕命により門弟100余人を率い、大砲四門・小銃50挺とその付属品とを携えて徳丸ヶ原で洋式砲術演習を行った。幕臣の江川太郎左衛門に伝授し長崎に帰った。
- ところが蘭学嫌いの町奉行島居羅蔵によって1842年謀反の罪で江戸に檻送投獄され、のちに追放に処せられた。
- その後ペリー来航など情勢変化で、1853年幽囚10年の後赦されて江川太郎左衛門の手付となり1855年には鉄砲方手付教授を命じられた。1857年富士見御宝蔵番兼講武所砲術師範役を勤め、武具奉行格として後進の指導と武備の充実に貢献した。現職のまま年69で没す。



徳丸原における洋式演習



大塩平八郎 (1793-1837)

- 与力 陽明学者代々の大阪町奉行は平八郎の学問と、声望を尊重し、諸々の政策について諮問することが多かった。ところが天保7年に町奉行に就任した跡部山城守(水野志邦の実弟)は平八郎を無視した。

折から天保大飢饉。

- 大阪町奉行跡部良弼が倉庫の米を江戸に回送するよう命じ、貧民を救済しないのに憤慨し、救済すべきとの意見書を出したが、入れられずついに蜂起した
- 大砲を撃ったりもした。
- 大阪市民は大いにたたえた。



8

吉田松陰 (1830-1858)

- 天保元年(1830)萩に生る。山鹿流兵学師範叔父吉田大助の養子となる。叔父玉木文之進から教育。
- 11歳にして藩主毛利敬親に山鹿流兵学を講義。
- 藩校明倫館の兵学教授。
- 佐久間象山からは「天下、国の政治を行う者は、吉田であるが、わが子を託して教育してもらっては小林虎三郎」と。



- 1851年東北地方へ遊学の際、通行手形無で脱藩行為を行い、土籍を失う。
- 1853年ペリー艦隊の来航を見て外国留学の意志を固め、翌年ボーハタン号へ赴き密航を断るが拒否される。
- その後松下村塾を引き受けて主宰者となり、。
- 1858年(安政5年)幕府が勅許なく日米修好通商条約を結ぶと、激しくこれを非難、老中の間部詮勝の暗殺を企画。
- 1859年(安政6年)安政の大獄、江戸伝馬町の獄において斬首刑享年29。

9

吉田松陰 (1830-1858)

- 松下村塾はわずか2年半
- 木戸孝允、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋、吉田稔麿、前原一誠など維新指導者を輩出
- ところで、塾生は各地から英才を集めたのではなく、そのほとんどが近所に住む少年、一体どんな教育をしていたのかが知りたくなる。



- 身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留め置かまし 大和魂
- 親を思う、心に勝る親心、今日の訪れ、何と聞くらむ



約50㎡

田中久重 (からくり儀右衛門1799-1880)

久留米の飾り職人の子弓射童子や、万年時計を開発エジソン型の天才
嘉永6年(1853)、佐賀藩に招聘され、更に長崎海軍伝習所に学ぶ。その間蒸気機関及び蒸気船の製造に成功。元治元年(1864)には久留米藩に帰り、藩の軍艦購入や銃砲の製造に携わり、その他久留米藩の殖産興業に貢献した。
明治6年(1873)に上京。明治8年田中製作所を設立。現在の東芝の基礎となった。



「知識は失敗より学ぶ。事を成就するには、志があり、忍耐があり、勇気があり、失敗があり、その後、成就があるのである」



長州五人組

- 文久3年(1863)5人の若者が密かに横浜港からイギリスに向けて出航。
- 山尾庸三 26歳(1837年生れ)、グラスゴーで造船を学び、明治4年に工学寮(後の東京大学工学部)を創立、豊實塾教育の父でもある。
- 井上聞多(井上馨) 最年長の28歳(1835年生れ)、初代外務大臣。
- 遠藤助助 27歳(1836年生れ)、造船事業に一生を捧げ、日本人による貨物造りに成功する。
- 伊藤博文 22歳(1841年生れ)、松陰門下 初代内閣総理大臣、大日本帝国憲法を発布、4度首相を務める。
- 野村弥吉(井上馨) 20歳(1843年生)、鉄道の父、新橋 - 横浜間に日本初の鉄道を敷き、以後、全国の鉄道敷設工事を指揮した。小岩井農場の創設者。



後列左から、遠藤助助、井上馨(野村弥吉)伊藤博文、前列井上馨、山尾庸三

長州5人組 山尾庸三

- 与えられた1人200両の留学経費では足りず、村田蔵六を説得し、藩邸の鉄砲代金1万両を担保に5000両を大黒屋から借用。ジャーディン・マジソン商会に手交
- 1863年5月12日深夜横浜出航 17日上海到着
- ペガサス号(約300t)に伊藤と志道(水夫として扱われた)
- ホワイトアッター号(約500t)に山尾、野村(少し英語)、遠藤
- 9月23日ロンドン到着(120日の航海)
- ロンドン大学 ユニバーシティカレッジ
- ウィリアムソン教授(化学)
- 半年後 伊藤・井上等は帰国
- 庸三はグラスゴウのネピア造船所で修行する
例ら アンダーソンカレッジに通学

1868年帰国



山尾庸三 工部省の設立(明治3年)

- 百工勸奨ノ事ヲ掌ル
- 山尾は工部権大丞

最初 英学の私塾を開く(弟子8名)
工学寮を設立 都検はヘンリー・ダイアー
(この時他に8名の英人が来日し教官になった)
赤羽の工部省工作局(職工480名製図、木型、
鑄造、鍛冶、輪軸場、製缶、硝子等々)に出か
けて実技演習
工部大学校(1878年)開校
土木、機械、電信、造家、鉱山、化学、冶金
第1回卒業生に高峰謙吉 辰野金吾(東京駅、日銀)
などの名がある
ダイアーは1882年に帰国



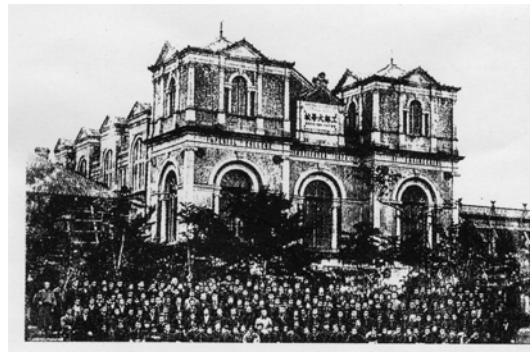
工部大学校の設立

- 明治6(1873)年7月、工学寮工学校として開校
- 明治10(1877)年1月、工部大学校となる
- 明治18(1885)年12月、工部省廃省後、工部大学校は文部省へ
- 東京大学では、工芸学部が設置
- 東京大学工芸学部と、文部省所管の工部大学校が合併
- 明治19(1886)年3月1日、帝国大学令が發布
- 東京大学は帝国大学となり、分科大学制度が採用
- 帝国大学工科大学が新設(現在の東京大学工学部)

15

工部大学校講堂

(資料 村松貞治郎「日本の近代化とお雇外国人」 株式会社 日立製作所、1995年)



明治維新の意義

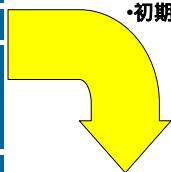
身分制度(士農工商)の廃止
 ・田畑勝手作の許可
 ・田畑永代売買禁止令の解除
 ・分地の制限撤廃

地租改正(全国一律金納)

交通・商業の自由化
 ・関所、伝馬制度の廃止
 ・物産の藩外移出制限解除
 ・株仲間による独占の排除

通貨・金融制度の確立
 秩禄公債による士族授産

・離農者の増加、労働力創出
 ・全国規模の商品市場創出
 ・工業用地の供給
 ・貨幣経済の浸透
 ・初期資本の蓄積



資本主義的生産の開始

勸業建白書

明治七年 大久保利通

大凡国ノ強弱ハ、人民ノ
 貧富ニ由リ。人民ノ貧富
 ハ物産ノ多寡ニ係ル。而
 シテ物産ノ多寡ハ、人民
 ノ工業ヲ勉勵スルト否ザ
 ルトニ胚胎ストイエドモ、
 其源頭ヲ尋ルニ未ダ嘗テ
 政府政官ノ誘導奨励ノ力
 ニ依ラザルナシ。

18